

# J.S.バッハ/教会カンタータ第56番「われは欣びて十字架を負わん」

"Ich will den Kreuzstab gerne tragen" BWV56

「バッハ教会カンタータ全集/指揮・H.リリンク」より、解説：礒山 雅、歌詞訳：杉山 好

初演	1726年10月27日
機会	三位一体後第19日曜日
書簡章句	エペソ人への手紙第4章22～27節 (真の義と聖とをそなえた神にかたどって作られた人を着るべきである)
福音書章句	マタイ伝第9章1～8節(中風を病む者の治療)
歌詞作者	不詳
編成	独唱(バス)、合唱4部、オーボエ2、オーボエ・ダ・カッチャ、 弦、通奏低音

不明のこの歌詞作者はザラモン・フランクの詩「我は欣びて十字架への道を歩まん」(1700年)を知っていたと思われる。またおそらく3週間前のカンタータ(第27番)の第3楽章で、同じくフランクの詩の一節をパラフレーズした人物であろう。

十字架カンタータ と呼ばれるこのカンタータの歌詞の内容はダイナミックに展開し、苦悩の後に神にへと導いてくれる十字架を、負う決意(第1曲)、航海に喩えられた、神の国をめざす人生(第2曲)、主を待ち望む者の喜び(第3曲)、そして来世への憧れ(第4・5曲)と進行する。

自筆楽譜には 独唱と弦楽によるカンタータ Cantata a Voce sola e Stromenti と書かれ、バッハ自身が カンタータ なる語を記した数少ない例のひとつである。

## 第1曲 アリア(バス) 全合奏、ト短調 3/4拍子

リトルネロ主題やバス声部には増2度音程と連続して下降する嘆息の動機が含まれ、各々十字架 Kreuzstab、負う tragen を象徴している。また 患難 Plagen に付けられた、半音階的に下降するゼケンツも圧巻である。

Ich will den Kreuzstab gerne tragen. Er kömmt von Gottes lieber Hand. Der führet mich nach meinen Plagen zu Gott, in das gelobte Land. Da leg ich den Kummer auf einmal ins Grab, da wischt mir die Tränen mein Heiland-selbst ab.	われは欣びて十字架を負わん。 そは神の尊き御手より来たり。 我を受くべき諸々の患難に会わせし のち約束の地なる神のみもとに導くなり。 そこにてわれは苦しみを一挙に葬り、 そこにてわれはわが涙をば 救い手ずから拭いたまわん。
--	---

## 第2曲 レチタティーヴォ(バス) チェロ、通奏低音、変口長調 4/4拍子

当日の福音にある「さて、イエスは舟に乗って酒を渡し、自分の町に帰られた」に由来して、チェロが綿々と奏する連続音型は波を描写。町に帰り着いて舟から降りた所で、この波の動きも止まる。波 Wellen、多くの vieler でのバスの動きも印象的。

Mein Wandel auf der Welt ist einer Schifffahrt gleich: Betrübnis, Kreuz und Not sind Wellen, welche mich bedecken und auf den Tod mich täglich schrecken: mein Anker aber, der mich hält, ist die Barmherzigkeit,	浮き世なるわが歩みは 船路にも似たり。 患難、十字架、窮迫の 波、次々とわれを襲い来たり。 板底一枚の下なる死をもて 日々におびやかす。 されどわが小舟を繋ぎ留むる錨あり。 そは、わが神われを
--	---

womit mein Gott mich oft erfreut.  
Der rufet so zu mir:  
Ich bin bei dir,  
ich will dich nicht verlassen noch versäumen!  
Und wenn das wütenvolle Schäumen  
sein Ende hat,  
so tret ich aus dem Schiff in meine Stadt.  
Die ist das Himmelreich,  
wohin ich mit den Frommen  
aus vieler Trübsal werde kommen.

しばしば喜ばせたまえる憐れみなり。  
かくして御神は我に呼ばわりて告げ給う、  
われ汝とともにあり、  
われは汝を見捨てず、忘るることもなし！と。  
しかして逆巻く荒波の船路  
終りに至らば、  
われ舟より出でてわが都に上らん。  
わが目ざす都こそ天つ御国にして、  
神を恐るる者らの群れにまじりて、われも  
多くの患難をくぐりて入り行くべし。

**第3曲 アリア(バス)** オーボエ、通奏低音、変口長調 4/4拍子

第1曲とは対照的。「我ようやく十字架から解かれん」と喜び歌う。 離れ去る weichen のコロラトゥーラが励む心を伝える。

Endlich, endlich wird mein Joch  
wieder von mir weichen müssen.  
Da kreig ich in dem Herren Kraft,  
da hab ich Adlers Eigenschaft.  
Da fahr ich auf von dieser Erden  
und laufe sonder matt zu werden.  
O gescheh es heute noch!

ついに、ついにぞわが軛は  
ふたたびわれより離れ去るべし。  
そのときわれは主にありて力を得、  
驚のごとくにならん。  
かくてわれは地を蹴って飛び翔り、  
ひた走るとも、疲ることなし。  
おお、今日にも時の来らんことを！

**第4曲 レチタティーヴォ(バス)** 弦、通奏低音、ト短調 - 八短調 4/4拍子

前半のレチタティーヴォでは、イエスの手から喜びて救いを得るとの覚悟が語られ、その後はアダージョに。第1曲の後半部分が変型された形で反復されよう。 涙 Tränen での3連音符の下降が特徴的。この反復によって、カンタータ全体の統一は一挙に高められることになる。

Ich stehe fertig und bereit.  
das Erbe meiner Seligkeit  
mit Sehnen und Verlangen  
von Jesu Händen zu empfangen.  
Wie wohl wird mir geschehn,  
wenn ich den Port der Ruhe werd sehn.  
Da leg ich den Kummer auf einmal ins Grab,  
da wischt mir die Tränen  
mein Heiland-selbst ab.

わが準備は成りて、  
わが救いの嗣業をば  
心よりの願いと憧れもて  
イエスの御手より受けまつるばかりなり。  
ああわが幸いのいかにばかりぞや、  
安息の港をば目のあたりに見んとき。  
そこにてわれは苦しみを一挙に葬り、  
そこにてわれはわが涙をば  
救い主手ずから拭いたまわん。

**第5曲 コラール(合唱)** 全合奏、八短調 4/4拍子

ヨーハン・フランク作(1653年)のコラール「汝、おお麗しの世界」の第6節。簡素ながら傑作。歌詞内容では、死によってイエスと一体になるという望みが 確かな港 に接岸した舟に喩えられていることから、第2曲とのつながりは明白である。また冒頭の 来たれ komm のシンコペーション、最後から2番目の行での減7和音の、ト長調への解決(死の悲しみから喜ばしさへの変化を表現)は注目して良い。

**Komm, o Tod, du Schlafes Bruder,  
komm und führe mich nur fort;  
löse meines Schiffeleins Ruder,  
bringe mich an sichern Port!**

来れ、おお死よ、眠りの兄弟たる者よ、  
来たりてわれをば連れ去れ。  
わが小舟のとも綱を解きて  
われを安けき港に運び行け！

**Es mag, wer da will, dich scheuen,  
du kannst mich vielmehr erfreuen;  
denn durch dich komm ich herein  
zu dem schönsten Jesulein.**

世の人、あるいは汝を忌み恐れんとも、  
われにとりて汝は喜ばしき使者なり。  
げに汝によりてぞわれは入りゆくなれ、  
こよなく美わしきイエス君のみもとに。